

皆さんこんにちは。今日は「月照と善通寺」というタイトルで少しだけ勤王僧月照のことについてお話しをしたいと思います。たぶん今日お集まりの方々は、もう月照という人物がどういう人物でどんな活躍をしたかについては十分おわかりな方がほとんどだろうと思います。私の口からあれこれ言っても、私は基本的に歴史学者でもなければ文献学者でもありません、言ってみれば通りすがりの新聞記者みたいなものですので、偉い先生方が集めてこられたさまざまな史料についてまとめて皆さんにご報告するというような立場です。ですので、月照の生涯そのものについてあれこれたくさん言うつもりはありません。

もう既に、世間にはいろんな書き物がたくさん出ていまして、例えばこれはちょっと古いですが『勤皇忠僧 月照上人』。昭和5年に発刊された、かなり月照のことを総まとめで書いている最初の本じゃないかなと思いますけれども、これは香川県内で企画されて出版されたものです。こういう本がたくさん出ておまして、私もこういうものを読んで「あ、そうだったんだ」というぐらいですので、実はあんまりそれ以上の知識はありません。しかし、新聞記者というのは岡目八目で、あんまり自分がその事実へのめり込んでいないぶん割合冷静にものごとを見たりして、「これ、おかしくないでしょうか？」みたいなことにすぐ気がつく立場にあるんですね。今回の月照についての調べものを始めたきっかけも、実は最初はそういうところだった。今からだんだん、おいおいお話をしていきますので、おわかりいただけるとと思いますけれども。

勤王僧月照。最近の子どもたちは本当にもうほぼ100%と言っていいぐらい、今の中学生、高校生、大学生ですけれども、若い子に「月照って知っていますか？」って聞いてもほぼ100%知らない。私は今68才なんですけれども、私より上の世代の人は割合月照の名前を知っていて、西郷隆盛との関係についても知っているんですけれども、私より下の世代の人はほとんどの方がご存じない。私も読者の方から「月照は讃岐の生まれですよ？」とって確認をされたことがあって、初めて「月照さんってどういう人なんだろう？」って若い頃に調べて、「そうか、そんなお坊さんがいたのか」というようなつながりでした。けど、そのあとにもいろんな、もう40年以上にわたって新聞記者をしていますけれども、ほとんど月照について書くチャンスってなかったですね。で、私が今回のことで月照のことを調べることができたのは、今皆さんのお手元に配らせていただいていますけれども、4年ほど前に2年間ぐらいにわたって『かがわの「都市伝説」』（四国新聞）というタイトルで地元に残っているいろんな伝説の話を少し丹念に調べてご報告するというような連載を書きました。月照については全4回から5回、関係のあるものを書いたんですけれども、そのときに初めて詳しく様々なことを書かせていただきました。

まず月照について、私たち新聞記者はいろんなところを調べるんですけれども、最近はインターネット上にWikipediaっていう百科事典が載っているんですよ。大概のことは載っています、恐らく今ではもう日本大百科事典に匹敵するぐらいの分量があるだろうと思います。もちろん正しくない情報もあつたりしていろいろと物議を醸したりもするんですけれども、多くの識者の方がそれを読んで、さらに細かい事実を積み重ねていって日々進化していく百科事典。なかなか便利なんですけれども。私も最初はそのWikipediaで月照のことを調べました。

そうすると、これはご存じの方もたくさんいらっしゃるかもわかりませんが、「月照は大坂の生まれだ」と書いてある。「大坂の生まれ？」ゲッショウって、月に、性格の性って書く月性さんってまた別の

方がいらっしゃるんですけど、何か、「これどういうことなの？ 何で大坂の生まれなんだろう。香川の人じゃないのか。善通寺の人じゃないのか？」っていうのが最初の疑問だったんです。これはおかしいなと思ってまた調べ始めたんですけども。（スクリーン：月照の肖像）そこには、今ここにちょっと拝借して掲げていますけれども、このような月照さんのお顔を描いたものが見つかりました。ぱっと見て、本当に眉目秀麗といますか眉毛は太くて目はしっかりとして、男前ですよ。月照の人柄についていろいろと書いてあるものがたくさんあるんですけど、その当時の表現を読みますと、「眉目清秀、威容端嚴にして、風采自ずから人の敬信を惹く」とあります。眉毛や目がすっきりとして、佇まいはとても威嚴があつてすばらしい。もうそこに居るだけでその人のことを尊敬してしまうような佇まいだ、って書いてある。これはすごいなと思いました。これを聞いてからこの絵を見たら、本当だなと。「この似顔絵はよく似ている」というふうに書いていまして、もし似ているんだったらこれは本当にイケメンだなと思いましたけれども。ところがいづれにしる、「大坂の町医者の子だった」って書いてあるんですよ。おかしいな、私の聞いている話では、善通寺市の碑殿町にある牛額寺から出たお坊さんだったというふうに情報が伝わっていたんです。どうしてこんなことになったんだろう、と。その辺から実は、いろいろなことを調べ始めて、それがやがて誤りだったとわかるんですけどね。

今、Wikipedia の記述には「月照は大坂の町医者の長男として、讃岐吉原（現在の善通寺市吉原町）に生まれた。」と書いてある。それまでは「月照は大坂の町医者の子として生まれた。」としか書いていなかったんですけども、その後の4年間ぐらいの間に「善通寺市吉原町」と今載っている言葉が入って、「ああ、ここで生まれたんだ」というふうな表現になったんです。ですが、これでもまだ実は間違いなのね。本当は月照、それから弟の信海が生まれたときに、お父さんはまだ大坂には行っていなかった。善通寺の吉原村にいて、子どもたちを育てるために薬の行商なんかをされていたとお聞きしています。ですから、大坂で町医者になったのは実は月照・信海が生まれてのち、いろんな事情があつて大坂に行って、そこで薬を商っているうちに町医者として認められて、おそらく優秀な方だったんだと思います、そこから大坂で居を構えて活動をしたというふうな流れだったようです。

それにしても、「どうして善通寺のことが出てこなくて、いきなり「大坂の町医者」なんだろう？」と思つて調べてみますと、江戸時代から明治期にかけて月照さんが住職をしていた清水寺の成就院にまつわる伝記物語の中に、「月照住職は大坂の生まれだ」と書いてある。で、それがあつた種の出版物みたいなかたちで清水寺からいろんな人に配られたもんですから、どうもそれを信じる人が多くなっちゃつた。これはやっぱり一度そういう風聞が広まると、元に戻すのってなかなか難しいんですね。それでも明治期を過ぎた頃から「月照・信海は善通寺市の生まれだ」ということがさまざまな研究者の中で盛んに言われるようになって、そういうふうな書いてある本が何冊も出版されたりしたんですけども、それでもなかなか誤解が解けない。そういうことが原因だったのかどうかはわかりませんが、「月照と信海の顕彰をもう一度しよう」となつて、その顕彰の中で銅像を造って牛額寺に建てようっていう活動があつたりして、明治の半ばぐらいから昭和の始めぐらいにかけて月照・信海の活動についてももう一度振り返るといふ時期がやってくる。

例えば、牛額寺にお二人の銅像を建てるんですけども、そのときなんかは寄付の活動を盛んにやつたりして、そういう顕彰活動の中心にいたのがあの有名な東郷平八郎元帥。彼が発起人になつて、東郷平八郎の名

前でいろんな顕彰が行われるという時代が何十年か続きます。その頃は月照が明らかに普通寺の生まれだということがわかっていたようなんですけれども、不思議なことに、戦後になって少し時期を経るとまたぞろ、先ほど言った Wikipedia みたいなところに「月照は大阪の町医者の子」って書いてあるのが出てきて、今度はまた町医者の子だっというのがあちこちに広まって普通寺との関わりが消えていくという困った現象が起こります。やっぱり清水寺というのは名刹中の名刹ですから、そこが公式に出した史料っていうのはやっぱりインパクトがあるんですね。「きっとこっちが本当だろう」みたいなかたちで。だけど清水寺自身もある時期からは「月照は普通寺の出身だ」っていうことをちゃんと書いてある。「お大師さんと同じ屏風ヶ浦の生まれ育ちだ」っていうふうに書いてあって、世間の風聞を訂正しようとするんですがなかなか止まらないんですね。だからその辺が、私がこの話を調べ始めてから大変興味を持ったところなんです。

例えば、牛額寺についてちょっとご紹介申し上げますと、（スクリーン：遍照院牛額寺の全景）これが牛額寺の本堂といますか寺領の一番大きなところですね。天霧山の裾野に位置します。この先に実は、（スクリーン：牛穴）これはご存じかもわかりませんが、牛額寺には霊牛が住んでいて、精霊の牛ですね、平安時代に体が一つに頭が二つっていう霊牛が現れて怪異な現象がたくさん起きたと。そしてその霊牛を治めるために牛額寺というお寺が造られたんだっというのがお寺の沿革になっているわけです。その霊牛が出入りしたという穴がこちらの穴です。牛穴。奥行きは4メートルあるかないかぐらいで、中に入るともちろん電気もついていませんから怖いんですけども、何があるかわからずに外からちょっとカメラを突っ込んで撮った写真です。（スクリーン：牛穴近くのお堂）で、実はこの牛穴の近くにもお堂が、阿弥陀堂みたいなお堂があるんですけど、これは「薬師堂」というんです。これが牛額寺の大本のお寺だったんだそうで、ここから発展をして今のお寺にだんだんとなっていくわけです。

（スクリーン：四国新聞の牛穴の記事）これはそのときに私が書いた牛額寺の都市伝説の話ですね。一身二頭の霊牛がこの穴を出入りしたんだっというお話。実はこの取材を牛額寺さんをお願いして引き受けてもらって、それでお話を聞きにお寺へ入ったんです。で、お話を聞いた鶴川さんという住職さんなんですけれど…。（スクリーン：月照・信海の石像）その前に石像を見ようということで。牛額寺は月照・信海の場所だっというのを知っていましたから。先ほどご説明した、霊牛が出入りしたという牛穴のすぐ近く、10メートルぐらい離れていますかね、同じ山の斜面のところですけど、ここに月照と信海の石像があります。昔は銅像だったんですけど、今は石像がある。私はこの銅像と石像が途中で入れ替わったという話を全然知らずにここへ来て、「立派な銅像がある」というふうに聞いていたのに、見たら石像なんですよね。「何で石像なんだろう、いつから石像になったんだろう？」と。

（スクリーン：看板「勤王僧月照・信海両上人由来記」）で、そこにはこんな両上人の由来記みたなものも書いてあって、これももう皆さんご存じのとおりで、月照が勤王佐幕のさまざまな明治維新の争いの中で、国事に奔走して一生懸命朝廷をもり立てて頑張って、最後には西郷隆盛と一緒に九州にまで逃げるんだけど、そこで逃げ場を失って、とうとう錦江湾に身を投げるっという一代記みたいなものがここにも書いてある。そして、最後の辞世の句として「大君の為には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも」この看板では瀬戸が「迫門」って書いていますが……、こういう辞世の句があったんだと。これはお兄さんのほうですね。それから、弟の信海のほうは「西の海東の空と変われども心は同じ君が代のため」と詠んでいる。信

海のお話もまたあとでしますけれども、月照の弟で七つ違い、八つ違い、それから四つ違いといろんな説があるんですけども、信海さんもこの牛額寺で修行をして、お兄さんと一緒に清水寺に上がって、月照が成就院の住職を辞めたあと今度は信海がそのあとを継いで住職になるっていう、兄弟二人して牛額寺と清水寺と両方で活動をするという方なんです。その辺のことが大体この看板に書いていますね。ただ、この場所はあんまり誰かが見に来ているっていう様子はなく、周辺の道の加減を見てもあんまり人が来ているふうじゃないなっていう感じではありましたね。

(スクリーン：月照の石像) それで、先ほどの月照上人の石像なんですけれども。なかなか立派な石像ではあるんですけども、私が思っていた月照の印象とはちょっと違うんですよ。先ほども言いましたけど、「眉目清秀、威容端嚴」っていうのはちょっと違うよなと思ったんです。(スクリーン：信海の石像) こちらは信海。信海も若くして紫の衣の「紫衣(しえ)」を得るぐらいの大変優秀な学僧でしたし、評判の高い方だった、それで顔もお兄さんに似てなかなかの男前だったというふうに伝わっているんですけども。これも実際に見てみると、何かあんまり迫力がないなって、申し訳ないんですけどそう思ってしまって、そんな思いをしながら牛額寺の取材にかからせていただきました。取材が始まって……、(スクリーン：石像周囲の玉垣) これが石像の周辺に建立してある柵の、その根本に彫られてある名前(刻銘)なんですけど、ご覧のとおり「松平家」が寄贈しています。だから、東郷平八郎が主催で顕彰碑を作ってそこに松平家が石碑を寄贈するっていうようなことですから、これは何かとんでもなく大変な人なんだなって、それを見ただけでもわかるんですけども。(スクリーン：両石像の全景) 遠くから見るとこんな感じです。これなかなかきれいな景色ですよ。ちょうど季節が今と同じぐらいで、この写真は4年前の11月だったと思いますけれども。

実はあとからわかるんですけど、かつてはここに石像じゃなくて銅像があった。で、この石像のある場所から牛額寺のところまで山をトコトコと下りて行って、鵜川住職にお話を聞いていましたら、(スクリーン：石像の除幕式当時の写真) ふと見上げると上にこういう額が掲げてあって、そこを見ると「昭和53年4月16日 除幕式」って書いてある。さらに「再建」って書いてある。「あの石像は替わったあとのものだったんだ」とそこで初めて気が付いて、「そうか、昔は銅像だったのが、なくなって、53年にもう一度建てたのか」と。それでずっと横を見ると、これは先ほどもありましたが「大君の為に何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも」という月照の辞世の句が墨書して飾ってありました。ただ、これは実物ではなくて、本物のオリジナルは海岸寺さんが持っているんだというふうに Wikipedia には書いています。私は残念ながら現物を確認していませんので、本当にそうなのかどうかは、先ほども言いましたけど Wikipedia はみんなで作る百科事典ですからすごく細かいんですけども、全部が全部、現時点で正しいとはちょっと言いがたいところがあるんですよ。探すのには便利なんですけど。それで、また見上げていたら、昭和3年当時の写真っていうのがあった。(スクリーン：昭和3年の両上人の銅像) これが牛額寺に飾ってあった戦前までの銅像なんだと。これがその写真を拡大したものなんですけど、これが月照ですね、そしてこれが信海。ポーズは今の石像とよく似ていますが若干違うんですよ。ちょっと戻りましょうか。

(スクリーン：現在の両上人の石像) 石像。この石像は実は、現代日本の彫刻家で大変有名な速水史朗さんっていう方がお作りになったというか、デザインをされた。実際は石屋さんが彫ったんですけども、デザイ

ンを速水さんがされて作られたんだということを聞いています。ただ、速水さんは抽象彫刻が得意で、讃岐の山とかそういうタイトルの作品を県内のいろんなところでご覧になったことがあるかと思いますが、あんまり具象はお得意じゃない方です。たぶん、何か断れない事情があって引き受けたのかなと思いましたけれども、（スクリーン：昭和3年の両上人の銅像）少なくとも昭和の前半にはこのような銅像があったんだと。

「じゃあ、それはいったいどこへ行ったんだろう？」と思って、調べてみますと、昭和18年に戦争の金属回収の供出運動があって、香川県内でも大きな銅像で取り外しができたものはみんな運び出して、みんな鋳つぶしちゃったんです。「何ちゅうことをするんだ。それで本当に鉄砲の玉はできたのかい」って心配するんですけど、とにかく、そうやって銅像も無くなってしまったと。今日はちょっと当時の写真が間に合わなかったんですけど、香川県内一円から、あの「一太郎やあい」のおばあさんの銅像も含めてみんな栗林公園の桜の馬場にずらっと集められて、最後のお別れの儀式をやっています。そのときの写真があって、ちょっと異様な光景ですよ、本当に。空海もいれば、月照、信海もいるし、いろんな有名な方の銅像がずらっと並んで、そこで、皆さんさようなら、戦争行くんで鋳つぶしちゃいますってということです。「うわー。こんなことをしてしまうんだね、人間は」と思いましたけれども、でも、生きるか死ぬかって言われたらしょうがないですよ。

そういうかたちで、月照・信海の銅像も無くなったんですけども。「残念ですね、これ」っていう話をしていたらご住職が……、（スクリーン：香川新報の紙面）これは昭和5年と昭和6年に月照・信海の銅像ができていよいよ竣工、完成してお披露目しますよという記事が香川新報から出ておりました。それで、ご住職が「実はこんな写真があるんです」って言って見せていただいたのがこれです。（スクリーン：月照銅像の原型を写した古写真）「作品 月照上人 朱越作」って書いていますけれども。この朱越というのは実は当時の三豊郡山本町にいた織田朱越という彫刻家なんです。あんまり世間的には有名ではなくて、あんまり名前を聞かれたこともない方だろうと思うんですけども、これはなかなか大した作品を残している方で、大きいものも得意なんですけれどもこれよりは小さいもの、何か特にカニとかを作らせると本当に生きていくのかと思うぐらいすばらしいものをたくさん残しています。その方がこれを作ったんだと古写真の隣に書いてあります。これ「原型師」って書いてあるんですけども、織田朱越作。で、「大正15年朱越作の月照上人は昭和18年軍命により供出される。二代目現在は速水史朗作昭和53年に石像として再建された。」って書いてあるわけです。（スクリーン：信海銅像の原型を写した古写真）もう1枚、信海上人の像原型の写真もあって、これにも同じような説明がついている。「そうなのか、そうだったんだ」と思いました。（スクリーン：宮武梅雅編『勤皇忠僧 月照上人』）これは実はお寺でもらったもので、予備がありますから一つどうぞとっていただいて、今はもう付箋だらけになっていますけれども。

「これはちょっと調べてみなければいけないな」ということで、あれこれ調べを始めました。まず、いろんなことを調べていきますと、実は月照・信海の一族の方が今も吉原町に住んでいらっしゃるんだということを知って、「これはちょっとお会いしないといかん」と思いました、行きました。教えてもらった住所地に行くと、（スクリーン：月照・信海両上人誕生地にある記念碑）このように月照・信海の生誕の地って

うことを書いた大きな石碑が道路脇にきれいに設置してあります。「そうかここなんだ」と思っとうろうろしていたんですね。すると後ろから男の方の声で、「もしもし、どちらさんですか？」って言う方がいらっしやって、えっ、と思っで後ろを見たら男の方が立っでいらっしやった。私はもうふいに「ひょっとして月照の親類の方ですか？」って聞いたら（笑）、いきなり聞いてしまったんですけど、「いえ、それは私の妻です。私は養子なので。妻を連れてまいります」って言ってご案内をしていただきました。その竹森さん。今日は実はその奥さんがいらっしやっているんです。大変恥ずかしがっていますから言わないようにしたいと思いますが、僕の真ん前に座っていますから、あとで顔を拝見して「そうかあなたが月照のか」って見ていただいたらいいと思いますけど（笑）。で、ずうずうしくもお部屋にまで上がらしていただいて、お話を聞かしていただいて……、（スクリーン：月照・信海両上人誕生地にある解説看板）あ、これは生誕の地の碑のところ月照・信海についての現在わかっている状況を善通寺市の教育委員会がお書きになっているものですけども。（スクリーン：竹森ご夫妻と竹森家蔵の史料）で、お部屋にまで入れていただいて、お茶菓子まで出していただいて、何かずうずうしい話ですけども新聞記者っていうのはこんなことばかりしているんです（笑）。申し訳ございません。

それでいろんなアルバムとかを見せていただきながら、「実はこんなものしかないんです」と言っで出っでいただいたのがこの写真の端っこにもちょっと写っでいますけれども、これですね。（スクリーン：竹森家蔵の三つの位牌）左から月照上人、信海上人、その横はお二人の叔父さんに当たる「蔵海」っていう方の位牌。お坊さんで、牛額寺の僧でもある。もう一つ言っで、蔵海は月照・信海のお父さんである玉井宗江さんの実の弟さんで、この吉原村に生まれて、先ほどお話しした牛穴があっで牛額寺に入っで得度をして、その住職になられた方です。大変優秀な方だっでらしいです。それでちょうどそのころ清水寺の院主さんをしておりましたケイカイ（？）という……、ちょっとごめんなさい、名前ははつきりわからない、忘れまっでけど、その方も実はもともとは牛額寺の僧侶で優秀な方です、清水寺に望まれて清水寺成就院の住職になっで。それでその方が退かれるとなっでたときに、そのあとを受けて蔵海さんが今度は牛額寺から清水寺に行くんです。蔵海さんが清水寺に行くとき、月照さんが、信海さんはまだちょっと年が下ですからね、月照さんが「僕も叔父さんと一緒に行きたい。それでもっと勉強したいんだ」というようなことだっでたようです。恐らく紆余曲折あっでたんだと思いますけれども、最終的には蔵海と一緒に月照は清水寺に上がっでいくと。で、それを追っでるように信海さんも恐らく何年かのちに清水寺に上がっで、兄弟で清水寺の坊主として活動を始めるといっでようなことになっでいくわけです。

それにしてもですね、「ちょっとこの位牌は粗末じゃないかい？」っていっでうふうに思われて、私も思っでただけど言わずにいたら、竹森さんが自分で言っでくださっでたんですけど（笑）「昔はもっでちゃんとしたものがあっでたのかもしれないけれど、もうこんなものしかないんです」と。どうしてだろっでと思っでたんですけども、これは時の幕府からすると、月照っていっでるのは維新のクーデターの大アジテーターなわけです。月照が演説をすると、多くの人があっで勤王運動に突入していく。先ほどまも言っでましたけども眉目清秀、威容端嚴、もっでそこにいるだけで皆んなが尊敬しちゃうっていっでうようなタイプの人ですから、その人が「天皇を守らなければいけない」っていっでう演説をすると、皆んななびいてしまっでう。すると幕府なんかどうでもいっでよみたになっでちゃうので、安政の大獄っていっでうのをご存じだと思っでますけど、あのとときに月照はもっでただではおかないぞとなっで追われる身になる。そこから先の逃避行が、先ほどちらっでとお話しをした西郷との逃避行になっ

ていくわけですが、その余波は吉原村にもやってくる。吉原村は京極藩ですよ。それから牛額寺はたぶん、あちらは多度津藩ですよ、住所的には。多度津の京極藩。親と子、兄弟ですかねもともとは。支藩ですが、一応藩が違いますが、「謀反人を自分の藩から出したなんていうことは、知れたらとんでもないんだ」と言って、両藩とも「月照・信海が普通寺の出身であったということを公言してはならぬ」となった。特に牛額寺に対しては「資料を全部捨てろ」と。それで資料をみんな弥谷寺、でしたっけ、に集めて焼却してしまうんです。当然ながら竹森家も同じです。もう何か、「お咎めがあつては困る」ということで、皆んなおびえてしまって一切合切全部なくなってしまうと。ところが、それから33年だか34年だかが経って、明治維新が成立したときには、今度は2人は英雄です。「維新を回天させた大英雄だ。大英雄をみんなで顕彰しなければいけない」とって、先ほど昭和5年の新聞記事を見せましたけれども、銅像を作って顕彰をして、月照・信海の功績について皆んなに伝えようということになった。ところが、竹森家ではみんな無くしちゃったものですからたちまち間に合わないんです。とにかくかたちだけでも整えなければいけないということで、慌てて用意したのがこの写真の位牌だったと。もちろんあとで作り直すことはできたんでしょうけれども、果たしてそんなことをすることがいいことかどうかという議論がたぶん頭の中にあつたと思う。今このかたちで、歴史もまさにこのかたちだからこそ歴史がわかる。これを残していただいて、私なんかにも見せていただいて大変勉強になりました。

(スクリーン：竹森家家系図) そのときに、竹森家の家系図っていうのも一緒に見せていただきました。この最初のところに「竹森安右衛門」って天命4年に亡くなった方がいて、その方の息子さんが「宇八」「宗吉」「蔵海」この三人だった。宇八っていうのは長男、いや長男だったかどうかはわかりませんが跡取りで、今の竹森家に続くひいひいひいじいさんぐらいになるんですかね。ご本人(公演会場の竹森夫人)からすると8代ぐらい前になるんですよ。で、宗吉っていうのは「専海」という名前でお坊さんになるんですけど、安右衛門さんは宇八さんに跡を取らせたあと、専海と蔵海の二人を牛額寺に入れて得度をさせる。それでお坊さんになりなさいって。恐らく優秀な子どもだったんでしょうね。牛額寺もそれを受け入れて、二人は小僧としてスタートする。で、ここからがちょっと色っぽいですけど、専海は高見島の理正院というところに入ってそこのお坊さんになる。ところが高見島に行ったらとんでもない島一番の美人と恋に落ちてしまう。これが玉井さんというお家の、高見島でも名家っていわれている由緒あるお家ですけども、そこの「お久さん」という女性で、これはこういうものを書いてあるだけですから本当かどうかはわかりませんが島一番の大変な美人だったと。ただ、信海と月照のあの似顔絵が本当だとしたら、これはきっと本当の美人だったんでしょうね。目鼻立ちもすごいすっきりしてね、すごい美人だったろうと。で、この二人が恋に落ちて、言ってみると破戒僧ですよ、道ならぬ恋に身を焦がしてしまって、あげくにお久さんは妊娠をするんです。赤ちゃんができちゃう。それで「もうこのままではお寺にはいられない」と言って専海さん、お父さんになった宗吉さんは「もう俗世間に帰ろう」といって還俗してお坊さんを辞めた。といっても帰る場所がないですから、普通寺吉原町の竹森さん、宇八お兄さんのところに身を寄せる。お久さんと宗吉、そして宗久さん(=月照の幼名)という子どもがいて、そこでまた綱五郎さん(=信海の幼名)という弟ができる。宗久と綱五郎の二人を育てながら、吉原村に住んでいたんですが、かわいそうなことに美人薄命というんですかね、お久さんは早くに亡くなってしまいます。お久さんがいた頃は、お父さんの宗吉さんは漢方薬

をずらっと並べて中四国一円に売り歩くっていう仕事をしてみたいんです。たぶんいろんな知識のある方だったんでしょうね、薬を商うっていうのはやっぱり薬についての知識が随分ないといけませんから。で、お金をためては普通寺に送って、子どもたちとお嫁さんを養うというような暮らしをしていたんですが、お久さんが死んでしまって子どもの面倒を見る人がいない。本家に全部そのまま預けるのも申し訳ない。といってもほかに術も無いわけで、そういうなかから二人を牛額寺に預けようということになった。先ほども言いましたけども、そのとき蔵海さんという宗吉さんの弟さんが住職をしていましたから、そこに預けて二人は得度をすることになる。だから、本当に月照・信海のお二人というのは普通寺で生まれて、普通寺で育って、普通寺のお寺で得度をして、普通寺でお勉強をしてっていうことですので、もう本当に上から下まで普通寺の人だったんだと思います。そうやって、二人は仏門に入っていくわけですね。

そのうち、先ほども言いましたが叔父の蔵海が清水寺の住職に抜擢される。清水寺はご存じのとおり大きな寺で、塔頭の寺が八つぐらい当時はあったと思うんですけども、そういう寺を全部総括するのが成就院です。ですからその成就院の住職になるということは、清水寺の、今は「貫主」みたいな言い方をしますけど当時はそういう表現はしていませんで「成就院の住持」というふうに書いていましたけれども。いずれにせよ、清水寺全体を管轄するお寺の代表に選ばれていくわけです。で、これも先ほどちらっと言いましたが、それに付いて月照も「僕も行きたい」と言って京都へ行く。ここから運命が少しずつ変わってくるんですね。

（スクリーン：俳優・近藤正臣）これ、誰かわかります？ ちょっとわかりにくいかもしれませんが、これならわかるでしょう。（スクリーン：若い頃の近藤正臣）これ実は、近藤正臣さんって、清水寺と関係がある方なんです。清水寺には忠僕茶屋と舌切茶屋っていう二つのお茶屋さんがあって、有名なお茶屋さんらしいですけど、そのうちの舌切茶屋のほうの最初の、初代の方が近藤正慎さんという幕末の志士なんですよ（※wikipedia より抜粋「近藤正慎は、清水寺成就院で出家し、兄弟僧であった月照を支援し尊攘運動に身を投ずる。安政の大獄に連座して捕縛され、月照の行方について拷問を交えて問われるが全く白状せず、獄中で舌を噛み切って壁に頭を打ちつけて自害した。」）。安政の大獄のなかで亡くなるんですけども、その遺族の方々が清水寺から「お父さん亡くなったから、君たちそこで頑張っていきなさい」って、清水寺の境内でお茶屋をする権利を認めてもらったんだそうです。そうやって何代も続いてきている。近藤正慎さんっていう人は、近藤正臣さんのひいひいじいさんぐらいに当たるようです。近藤正臣さん自身はあそこのお寺で育ったわけではないようですけれども、そんなお話があると。

もう一つ。忠僕茶屋っていうのが清水寺にあると言いましたが、この「忠僕」っていうのは忠実な僕（しもべ）のことですね。大槻重助という月照のお付きの人、下働きをする、まあ下男なわけですけども、実はこの人っていうのが、月照が安政の大獄で追われて大坂とかあちこちに逃げていくんですけど、その逃げていく道もずっと一緒に同行して、最後、錦江湾に飛び込むときも横にいた人なんだそうです。自分の主人が入水自殺して死んでしまったあと、現地の鹿児島で弔いを済ませて、その遺骨を持って京都・清水寺に帰ってきて奉納しようとするんです。ですが、幕府のほうは「そうはいかない」と。「おまえずっと一緒に月照と居たら、月照が死んだのは本当か」って言って、大槻重助を捕縛して尋問。っていっても当時はもうほとんど拷問なんでしょうけれども。さまざまな取り調べを受けて、もう瀕死の状態でようやく帰してもらおう。そののち、帰ってきた大槻重助をこれまた先ほどの近藤正慎さんのときと同じように清水寺が「そのままじゃ

かわいそうだから、ここでお茶屋をする権利を与えてあげる」って言って、そのときのお茶屋が代々続いて、今では忠僕茶屋と舌切茶屋っていう名前が続いていると。これはなかなか面白いと思う。清水寺は歩きたびにいろんな話が出てきて、近藤正臣さんまで出てきたのには私もちょっとびっくりしましたけれどもね。

(スクリーン：原銅像鑄造所の外観) 先ほどの話にちょっと戻りますけども、竹森さんのところでいろいろお話を取材させていただいて「ぜひ、あの銅像を作った織田朱越さんの業績っていうのを知りたいな」と思って、どこかに調べる伝手はないものかと探していたら山本町に、今は三豊市になっているんですかね、山本町に「原銅像鑄造所」というのがあるのを知りました。「ここに行けば織田朱越さんのことが少しわかるんじゃないかい？」って言われて訪ねてみました。(スクリーン：原銅像鑄造所のパンフレット) その当時、4年前ですけど、「今はもう大きな銅像はやってなくて、小さなものしかやってないんです」っていうお話だったんですけど、部屋に入って見せていただいたら、日蓮聖人像とか「一太郎やあい」のおばあさん像もここで作ったものだったんだと知りました。坂出の久米栄左衛門像もここで作ったんです。こんびらさんにある大久保謙之丞像もここで作ったと。要するに、県内の大きな立派な銅像のほとんどが、実はこの原鑄造所で作られていたんですね。だからその業界では大変有名な場所で、そこに織田朱越さんという原型師も勤めていたんだと。織田さんは若干親戚筋にもなるんですけども、直接の原鑄造所の経営者ではありませんで、原鑄造所と一緒に歴史を刻んだような人だそうです。「そうなんだ」と思いながら見ていたら、ちょうど座った席の横にこんな作品が展示してありました。(スクリーン：原鑄造所内展示の木像) ちっちゃいんですよ、これ。大きく写っていますけどこのぐらい(15センチ程)しかない。だけどものすごくリアルな像ですよ。「へえ、ものすごい技術だな。こんなことする人いるんだね、香川にも」と思って、「これ、もしかしたら織田さんのかな」と思って聞いてみたら、やはりこれも織田朱越の作品だった。「そうかなるほど」と思って……。 (スクリーン：三豊市市民交流センターの外観) まあ、これはあとの話になりますけども、織田さんの作品が見たいと思って三豊市市民交流センター、高瀬ですかね、にあるんですけど行ってきました。そこの玄関ホールのところこういう作品が飾ってあります。(スクリーン：三豊市市民交流センター内展示の木像) これも織田朱越作。これもあんまり大きくないですよ。せいぜい35センチぐらいですかね。だからその克明さたるや大変なもんです。大変な技術だねと思いました。(スクリーン：月照銅像の原型を写した古写真) 「それがこの人(※原型像の隣には織田朱越も写っている)なんだ」と思って、今、原さんのところの跡取りをされているヒラウチさんとかいろんな方が出てこられて話をさせていただいたんですが、「織田朱越さんってこれも作られたんですよね？」って言って、牛額寺で見せてもらった写真のコピーを見せてお話ししていたんです。「きっとこれは原鑄造所の中で撮った写真なんだろう」と勝手に思いながら質問していたんですけど、そうしたら原さんが「これは朱越ではありません」って言うんです。「え。朱越じゃないって、牛額寺さんも自分のところにかつてあった銅像は織田朱越の作品でって信じてますし、周りの人も皆んなそう信じてますよ。織田さんじゃないんですか。じゃあどなたでしょう？」って聞いたら、「これ見てください」って言われて、(スクリーン：前出の古写真裏側) 裏を見たら、これももう破れ写真ですけど、「月照上人 原型像」って書いていて「製作者」「(原型師)」とある横に「福田精洋」とある。全く違う人の名前が出てきた。それで、写真を見せたら「これ(古写真の原型像の隣に写っている人物)は明らかに織田朱越じゃない」と。織田朱越さんっていうのは総髪で、長い髪をしていて、もうちょっと何か迫力

のある感じのお顔をしていたそうです。写真の方はすごい二枚目ですよ、サラっとしたね。で、織田朱越は当時ここで確かに原型師をしていたけれども、これはどうも、この写真の方は福田精洋さんっていう方らしいんです。帳簿を調べてみても、確かに月照の銅像はここで作られていた。だけどその原型師は福田精洋さんだと。「それはぜひ、福田精洋さんについて知りたい」って言ったら、原さんとかが「いや、うちでは全くわかりません」、「聞いたことないんですか？」って、「全く聞いたことのない名前です」、「ほかに福田さんが作った作品とかっていうのが、ここに残っている形跡はありませんか？」って丹念にしつこく調べたんですけど、「ありません」と言うんです。（スクリーン：信海銅像の原型を写した古写真裏側）これは信海のほうの写真の裏で、これは牛額寺で見せていただいたコピーの、現物にあたる写真なんです（※そこには「信海上人 原型像 仲多度郡吉原建立」とだけ書かれてある）。現物は原鑄造所にあったんですね。ただ、原さんたちはやはり「福田さんのことはわからない」って言うんですよ。

織田朱越さんっていう人は面白い。面白いっていうとあれですけど、どうしてこういうことになってしまうのか。

実は、織田朱越さんが一太郎やあいの銅像の原型を作ったっていうことは間違いありませんけれども、新聞を含めてほかの、多度津町の文化財の原典のところにも「一太郎やあいの銅像は香川出身の新田藤太郎が作った」って書いてあるんです。で、それを元にして四国新聞も含めているいろんな出版物がみんな「新田藤太郎が一太郎やあいの銅像を作った」って書いてあるんですが、実はあれは織田朱越さんの作品なの。それで今度は逆に、織田朱越さんの作品だと言われていた月照・信海像がどうも織田さんのものではないと。少なくとも月照像については「原型師 福田精洋」ってわざわざ書いていますから、もうほとんど間違いなく違う人なの。これは困りましたね。いったいどういうことなのでしょう。原鑄造所は戦災で焼けたりもしていませんし建て替えもしていないので、先ほどの原型像と福田さんが写っている古写真を見ていただいて、「これはこの建物の中のどこかではないんですか？」って尋ねたら「いや、ここの土間のようなだけでも、小さな写真で端っこしかないから必ずここだとはちょっと言いがたい」と。「じゃあ、ここの土間に置いて写真撮ろうっていうようなことはよくありましたか？」って聞いたら、「もうその当時の人がいないので、その辺まではよくわからない」と言って、残念ながら探索はそこで切れてしまった。「いやあ、これは困ったな。せっかく信海・月照、丹念に辿っていけるかなと思ってたのに」と思っていたら、「ただ、こんなものがあるんですよ」って言って原さんから見せていただいたのがこれなんです。

（スクリーン：丸缶に入った映画用フィルム）これ、わかりますよね。映画のフィルムです。タイトルも書いていますが、「『西郷と月照』全巻3巻之3巻」って書いてありますね。これにあと1巻、2巻もあるっていうことだと思いますが、どうも『西郷と月照』っていう映画がかつてあったようです。そんなの全く初耳だなと。これはいわゆる16ミリフィルムのようなのですが、「映してみたんですか？」って聞いたら「いや、いろいろくっついてるので、あんまりさわれないんだ」と。「どうしてもっていうんだったらNHKのフィルムライブラリーとか、国のそういうライブラリー関係のところを持って行ってちゃんと修復してもらうことも可能かもしれないけれども、現状では何が写っているかはさわれないんです。ただ、こんなものもあります」と。（スクリーン：ラッシュフィルムから焼き出した写真）これ、この中のラッシュの写真です

よね。どうも映画の宣伝のためにあちこちから焼いたやつをこうやって置いてあったみたいで、まさにこの真ん中の写真なんかは、月照と西郷が錦江湾に飛び込もうとしているシーンを撮っているものですよ。「えー、すごい」と思っていたら、「ついでにこんなものもあります」って言って、次々に出してくれたんですけど(笑)。

(スクリーン：新聞の切り抜きが貼られたスクラップブック) このようなスクラップブックと一緒に保管されていました。(スクリーン：切り抜き A) ここを見ますと、これは鹿児島新聞の記事なんですけれども、月照と西郷の映画が昭和の初めに撮られたことが書いてあって、見出しには「映画史劇 西郷と月照 愈々近日市で封切 十四日南州寺で打合會」と書いてある。記事の内容「……一萬三千フィート (※フィルムの総延長) はいよいよ内務省検閲済になり近日中より市内某所に於いて……」っていうのを読むと、これは戦前の話だねって。「内務省」っていうのは戦後はありませんからね。戦前の話で、まだ戦争が盛んになっていない頃、恐らくは昭和の5年から10年くらいにかけての記事なんだろうなと。残念ながら、これはよくあることなんですけども、新聞記事って皆さん切り抜くと日付がわからなくなることがよくあるんですよ。記事はあるんだけど、何月何日の新聞かよくわからない(笑)。日付のところもぜひ書いておいてほしいんですけども。で、また小見出し「月照上人映画 試寫會 本日午後二時」って書いてあって、記事を読むと、鹿児島新聞社のホールに招待者を集めて「一代記の試寫を行ふこととなった」と。(スクリーン：切り抜き B) このほかにも、「勤王僧月照と西郷の映画試寫」という記事。これをずっと丹念に読みますと、高尾町と清水寺と、それから善通寺と、錦江湾、鹿児島とでロケをして映画を作ったというふうに書いています。残念ながら、あんまりこの映画を観た記憶のある人とか、見ましたっていう人に出会ったことがありませんけれども。(スクリーン：切り抜き C) これは映画を観ての感想記事。「素晴らしい史劇 西郷と月照」っていう見出しで、中身はどれほどすごいのかっていうのを書いていますけれども。これ、会場の竹森さんに聞きたいんですけど、「月照上人に扮した竹内東雲氏は實(じつ)に月照上人の血縁の人で月照上人そのものである」って書いてあるんです。聞いたことありませんか？ 竹内東雲(とううん)。親戚だって書いてある。ということは竹森さんの親戚だっていうことじゃないかなと思って(笑)。なかなか男前ですよ、さっきのラッシュの写真を見ると。なかなかいい男ですよ。「へえ、そうだったんだ、この頃は盛り上がったんだね」と思っていましたら、次はこれです。

(スクリーン：『月照・信海両上人銅像建設寄附人名簿』表紙) まだ次々と出てくるんですよ、この原鑄造所で。これの頭には「月照・信海銅像建設事務所」とあって、その事務所自体は原鑄造所ではなくて牛額寺にあったようです。で、「これは原本だな」と思って恐る恐る中を見たんですけど、中にはお一人の名前も記録されていなくて「これは予備のものだったのかな」と思いましたけれども。もしかすると本物の名簿はまだ牛額寺のどこかに残っているのかもしれませんが。牛額寺が事務所ですからね。で、「大正十一年十二月十五日 香川県許可」って書いてありますから、大正11年の暮れからこういう募金運動が始まって、何年間かけて昭和5年に銅像ができますという流れになったんだというのがわかります。(スクリーン：『月照・信海両上人銅像建設寄附人名簿』見開き A) そのときの計画図がこれです。これは「月照上人銅像建設計画図」と書かれてありますけれどもね。こういう銅像。出来上がったものとは随分違うんですけども。(スクリーン：『月照・信海両上人銅像建設寄附人名簿』見開き B) こっちなんかはさらに違います、「信海上人銅像建設計画図」。あ、ちょうどここ(計画図の隣のページ)に書かれてありますね、「仲多度郡吉原村 遍照院内 月照信海両上人銅像建設事務所」って。「遍照院」っていうのは先ほども言いましたが牛額寺の

ことです。当時のご住職、今はノガワさんですけど、当時のご住職はオオツカさんという方で、こういうことに大変熱心な方で、強いリーダーシップを持っているような方だったようです。その方が恐らくこの建設運動を進められたのではないかなど。

(スクリーン：或る書物)最後に、映画『西郷と月照』がここ香川県の地元で公開された記録はないのかと思って、探していたら、これ。書かれた日付はよくわからないんですけど、「月照と西郷映画貸約束ノコト」と始まっていて、「昭和廿六年十二月拾日初日……」ですから、どうもこれは戦争が終わってからですよ。「高松田町劇場ニテ三日間公開ノ約束……」当時の田町に劇場はいくつかあるんですけど、東宝とか、そのすぐ横にも、今はホール・ソレイユっていうのが建っているところの横に中劇っていうのがあって、戦後しばらくはホール・ソレイユの前身になります大映ですかね、高松大映劇場っていうのがそこにあったようですから。もしかするとそこで三日間上映をかけた可能性があります。「やった」とは書いていないです。「公開ノ約束」、「フィルム拾四巻也 原常次郎持行」って書いていますよね。それから「一卷ニ付一回壱百円ト定ム……」これは賃貸料のことです、随分安いので戦前かなとも思ったんですけども。でも最初のここ、「昭和十六年」じゃなくてやっぱり「廿六年」のように読めるんですよ。横からぼっと汚れが(線が)入ったのかもしれないけれども。まあいずれにしましても、こういうものが出てきましたと。ということは少なくとも大正の終わりから昭和の戦前にかけて、かなり香川県内一円でも月照・信海を顕彰しようという動きは強かったんだと思います。

(スクリーン：月照・信海についての冊子)さらに月照・信海については、今日は竹森さんにもお越しいただいていますけれども、こういう地元で作られた小冊子がたくさん出ておりまして、これを見ていただくと両上人についての大体のことがおわかりいただけると思います。かなり詳しいものが、今日は原本を持ってきていますのであとでご覧になりたい方があったらお見せいたしますけれども、四国新聞の切り抜きも含めてかなり細かい記述が集められていて、立派な作業をされているなというふうに思いました。先ほどの例で言うと、信海についての報告があんまりないのでうちちょっと信海についてお話ししておこうと思います。ただ、これは残念ながら私が調べたものではなくて、ここに出てくる範囲でのことですけども。信海は「文政4年生まれ。月照より少なきこと8歳」これを書かれた方によれば8歳年下だと。「幼名を綱五郎、またはチョウマルと申しました」「文政12年、信海9歳の秋、叔父・蔵海の指導をもって清水寺の光乗院に投じ」と書いています。9歳ですから、月照が上がってほんのすぐ、一緒に行ったんじゃないかなというふうにも思えますけれども、かなり年齢は開きがありますので。「天保元年、信海10歳の秋には光乗院住持の名を負い」これは10歳のときに早くも塔頭寺院の光乗院の住持になった、僧侶として認められたということですから、随分勉強のできた方なんだと思います。その後、東大寺で勉強をしたり高野山に上がって勉強をしたり、地元に戻って……、「善通寺」とは書いていないんですけど、地元に戻って漢学の先生に付いて勉強をしたりっていうことが書かれています。お兄さんが出奔をして追われる身になったあと、住職に就いて、住職になってからも清水寺に随分大きな貢献があって非常に高い評価を得ていた、ということが盛んに書かれています。で、お兄さんが西郷と一緒に水に飛び込むわけですけども、これは周りにたくさん人がいたときのことですから、皆んな大慌てですけども何とか二人の体をすくい起こしたと。だけど月照はもともと死ぬつもりで入っていますから、そのまま死んでしまって、一緒に死ぬつもりであった西郷もそ

のときは意識不明でかなり重篤な状態であったようですが、もともと体が丈夫だったんでしょうね、一人、息を吹き返したと。だけど息を吹き返したあと、西郷は大変つらい思いをしたようです。晩年に至るまで、何か事あるごとに「本当であれば私は月照上人と一緒に死ぬ身であったのに、こんなに長生きをしてしまった。国家のためにやるべきことがあるから致し方ないけれども、ちょっとでも早く、月照さんのもとに馳せ参じたい」ということを言っている。周りの人たちも西郷隆盛が月照との心中に失敗したことを悔やんでいるっていうことをよく知っているんで、できるだけ心中話についてはふれないようにして、やはり何か腫れ物にさわるような扱いをしていたということが書かれています。そののち、信海はまだ39歳だったと書いてありますけれども、月照が入水自殺をしてから半年ぐらいの間に、江戸幕府からお咎めを受けて「おまえは兄と一緒にそういう活動をしたに違いない」と疑われます。ただ、私が調べている範囲ではほとんどそんな活動をした形跡が出てこないんです。勤王家であったことは間違いないんですけれども、お兄さんのようにあちこちへ行って勤王の志士を勇気づけたり……、例えばお兄さんは朝廷と志士たちとの間の連絡係みたいなこともやっていたので、近衛さんとか青蓮院宮とかからいろんな指示が出たらそれを志士たちに伝える、またはそういう人たちをまとめていくというようなことをやっていて、明らかにアジテーターとしての大きな力があつた。だからこそ追われたわけですがけれども。しかし弟の信海はそこまでのことはしていない。ただ、真面目な人ですから、呼ばれて「おまえはどうなんだ」って問われたら「気持ちは勤王だった。そんなことはしていないけれども気持ちは勤王だ」っていうぐらいのことは言っていたようです。それで京都では収まりがつかなくなって、江戸にまで送られます。伝馬町に送られて、実は当時のほかの僧侶たちもそういう活動に近かった人たちは皆んな呼ばれて繋がれたようです。それでも僧侶に対しては、拷問めいたものというのは少なかったというふうに言われているんですけど、信海さんはどうも体が弱かつた。江戸に着いたときにはすでに病気がちであつたようで、それから程なくして、獄舎でそのまま病死してしまう。これはいろいろな史料を読むと、どうも拷問の結果というのではなくて、本当に普通の、普通の病気っていうのもおかしいですけど、何か風邪をこじらして肺炎になるみたいな、当時の肺炎なんていうのはもう死病ですからね、それで亡くなってしまうというようなことだったのかなと思われます。

いずれにしても、こういう偉大な僧侶が二人、それぞれここ善通寺の牛額寺で得度をして学んで、清水寺に上がって住職となり天下に名前を広めていく大きな活躍をしたという事実。これは多くの方々に、これからもできるだけ知っていただいて、二人の顕彰をしていただければというふうに心から思います。若干、時間がまだ残っていますけれども、皆さんからのご質問があれば私の答えられる範囲で、また持っている資料の範囲でお答えできればというふうに思います。どうも長いお時間ありがとうございました。

*** 質疑応答 ***

【明石氏】まず私からの質問なんですけど。竹森さん。あ、ごめんなさい、勝手に言っていますが、今日はご一族の竹森さんがお見えになっていますのでちょっと聞きたい。映画『西郷と月照』の話は全くご存じなかったですか？

【竹森夫人】全然、知りません。

【明石氏】そうですか。初耳だったですか？

【竹森夫人】はい、初耳でした。

【明石氏】あのフィルムを何とか復元して、観てみたいもんだと思うんですけど。復元するのって高いらしいんですよ、値段が。だから原さんのところで「じゃあうちがやろうか」というレベルのことではないんです。フィルムは固着すると、あれは昔の樹脂ですからあんまり丈夫じゃないんですね、引っ張ったりするとパキッと折れてしまうみたいな状態なので、何か特殊な方法があるんだそうです。NHKとか国会図書館のフィルムライブラリーなんかでは、そういうのを何千万円もかけて機械を作ってやっているみたいで、そういうところに頼めばできるのかもしれませんがね。今日はどちらかっていうと私のほうから知っていることをずっと並べてお話ししたわけですけども、皆さんの中で「私はこんな話知ってるぞ」というのがあったらぜひご披露いただけたらなと思うんですけども……。ありませんか。

月照さんと（総本山）善通寺さんとの関わりというのは全く書かれていませんけれども、実際に無いんでしょうかね？

【司会者（善通寺僧）】僕は、詳しくはないです。

【明石氏】あんまり聞いたことないですよ。いろいろと、筋も違うから難しいのかもわかりませんが。ただ「月照さんが善通寺の出身だということを知られたくない」と言って京極藩が咎め立てをして、資料を全部焼いてしまったというのは非常に残念だと思いますね。もしいくらかでも残っておれば、今、私が伝聞で聞いたようなものだけじゃなくて、本当に現物資料にあたって「こうだったんじゃないか、ああだったんじゃないか」みたいなことを言っていけるんですけども、そういうのが全くできないというのが大変残念だなというふうに思います。

【聴講者 A】今日配布していただいた資料の2枚目（四国新聞 2015.12.12「かがわの都市伝説」切り抜き）ですが、見出しに「大阪生まれと間違われ」とあって、その記事中に「出生の事情については……『勤皇忠僧月照上人』がくわしい。著者の宮武梅雅は大阪時事新報社の記者で……」とありますが、この人が書いた新聞記事っていうのはないんですかね？

【明石氏】これね、どうもこの大阪時事新報社のあとを受けた会社っていうのが無いんですよ。だけど、この記者の方が『勤皇忠僧月照上人』を書いたご本人なんですよ。ご本人が、紙面に書いた記事を土台にして、もう一度本にしたと。なので、たぶんこの本に書かれてあるようなことをもともとは違う形式で新聞連載にして、記事にしていたんだと思うんです。もしかするとその新聞記事が今も国会図書館とか大阪の図書館に……。でも、大阪も戦争で焼けましたからね、有るかどうかはわかりませんが。少なくとも私がインターネットを通じて調べたような中では、この方の新聞記事には行き当たりませんでした。残念ながらね。ただ、この大阪時事新報社の記者・宮武梅雅さんという方はこの記事（本）を書くにあたって……。牛額寺の寺男で山下繁造さんっていう方が90歳近くまで生きていたんですよ。それで宮武さんはその生前の山下さんに会って、幼い頃の月照・信海の……。幼いって言っても山下さんご本人も6歳からお寺に入っているんですけど（※この宮武梅雅著『勤皇忠僧月照上人』の出版年が1930（昭和5）年で、大阪時事新報に連載されていたのは1920（大正9）年11月16日～21日号とみられる。宮武の山下翁への取材もこの時期か。なお、

山下翁の生没年は不詳。月照の生年は1813年。)宮武さんは山下さんに取材して「月照・信海について“どんな人だったか?”というようなことを直接聞いて書いた」というふうにこの中で書かれています。ただ、これはどこをどういうふうに言ってそうなのかわかりませんが、山下さんの言葉が大阪弁になっているんです。「いやほんまに月照はんっていう人は危ない人でしてね」っていうような表現で書いています。これは本当は大阪弁ではなくて、善通寺弁で喋らなイカンとこですけれどね(笑)。そのページありますか、あ、ありました。「“月照はんと云う人はどだいまあ物騒な人でな”と言って、いろいろとお話をしてくれた」というふうに書いています。宮武さんという方は随分熱心な方で、大阪からこちらまで来られて、この山下さんにお会いになって、山下さんが生きていた間に山下さんが見聞きした月照・信海の行動やさまざまなことを跡付けながら取材をやっているのだから、これはかなり正確な本なんだろうと思います。

この本はどうも、たぶん復刻版を出しているのではないかと。これ(※手に持った明石氏の蔵書の『勤皇忠僧月照上人』)そのものが復刻版じゃないのかなという気がしているんですけども、しかしどこにも復刻版という記述はないんですよ。これは「昭和5年の印刷」となっていますが、昭和5年の印刷でこんなにきれいな状態っていうのはちょっと考えにくいんです。普通は大体、紙も酸化してしまっていて、50年も経てばもうさわっただけでもわかる状態になっているんです。だから、たぶんこの本は再版されたものだろうという気がします。この辺のことは、たぶん牛額寺さんあたりにお問い合わせになると少しわかるかもしれません。これは竹森さんのところにもありますか？ 届いていますか。そうですね。

【竹森夫人】でも牛額寺さんにはもう無いんです。

【明石氏】え、無いんですか。あれ？ だけどこれは牛額寺が作ったんですよね、恐らく。そうですね。

【竹森夫人】このあいだ「一冊だけどうしても」と無理を言って、頂いたんですけど、今おっしゃるとおり、すごくきれいな状態でした。

【明石氏】きれいでしょ。私もおかしいなと思って。

【竹森夫人】それにしたら、紙も良いし、きれいでしたよ。

【明石氏】そうですね。だからたぶん復刻版なんだろうと思います。だけど読んで見てもあんまり矛盾したことも書いていないので、それなりにきっちりとした取材でお書きになったものだろうと思います。一人でもこういう活動を熱心にしてくださる方がいたら、そういう人たちの実績がね、のちのちにまで伝わるので、大変ありがたいなというふうに思いますけどもね。

【竹森夫人】ここのお寺さん(総本山善通寺)と牛額寺さんのつながりって、先ほど月照とのつながりとかって仰っていましたが、あの石碑ができたときには、この当時の管長さん、蓮生善隆さんという方がいらっしやって……、

【明石氏】そうですね、石像の、新しい昭和53年のやつですね。そのときは蓮生さんが出てきていましたね。

【竹森夫人】そうそう、それで除幕式をしたと。

【明石氏】そういうことで言うと、あれですね、お大師さんが生まれた屏風ヶ浦で1000年のちにまた偉いお坊さんが出てきたということですね、やっぱりなんとなく善通寺というのは名僧、高僧を輩出する、そういう風土があるのかなというふうに思わざるを得ません。

さらに言いますと、今日ここへ来る前にも寄ったんですけども、赤門筋の門前に善通寺市立郷土館っていう資料館があります。誰も来ないので閑古鳥が鳴いていますけれども、あそこも実は大変な宝物がたくさん

あるんです。王墓山古墳から出てきた金銅製の冠帽、あれなんかは、ご覧になった方は……、頷いている方は皆さんご覧になったんだろうと思いますけど、あれは大変なものですよ。国宝にこそなっていないんですけど、恐らく学者に聞いて「これと、奈良の藤ノ木古墳の金銅製の冠帽とどっちが偉いん？」って尋ねたら、「いやあ、どっちとも言いがたい」って言うぐらいの貴重なものです。またその奥に、今日もありましたけれども、善通寺の仙遊遺跡から出てきた石棺の蓋が展示されています。その石棺の蓋には、「人面紋」といって人の顔に入れ墨を模した模様をいれた紋、これぐらい（直径15センチ程）の紋ですけど、そういうものが石の棺桶の蓋に描いてあるんですよ。これは「人面紋石棺」といって日本で唯一のものです。もっと言いますと、この人面紋石棺は、人面紋が写された遺物の中で最大のものです。石棺の蓋ですから、高さはこのぐらいのもので、もちろん一人ではとても持ち上げられるようなものではないんですけども。その人面紋がなぜ大事かというと、空海さんの誕生地である総本山であるあまり軽々しいことは言えませんが、空海さんの一族「佐伯氏」っていうのは、古来からこの一帯を治めていた豪族で、今言っている王墓山古墳とか、それから宮が尾古墳とかそういうものはほとんど全部お大師さんの一族に関係する古墳だというふうに言われているんです。で、その古墳地帯の真ん中に「仙遊遺跡」っていう、今も仙遊町ってありますね、あそこです。かつてお大師様が遊んだ場所だというのでそういう名前が付いたっていうふうに聞きましたけれども。で、その仙遊遺跡から出てきた石棺の蓋に、人面紋が描かれていると。人面紋っていうのはこれはただ珍しいだけじゃなくて、ご存じの方もいらっしゃると思いますけれども、邪馬台国伝説の中で魏志倭人伝っていうのがしょっちゅう出てきますよね。これは魏という国の歴史書の中に、倭人の項っていうのがある。全部で2000字ぐらいしかない項なんですけど、その記述の全部が「魏志倭人伝」といって、そういうふうに日本人の口の端に上っているので、何となく日本人はみんな「『魏志倭人伝』っていう本があるのかな？」と思いますけどそうじゃない。『魏書』っていう歴史書があって、その一項、わずか2000字程度のものですから、ページ数で言うと2、3ページしかないんじゃないかと思いますが、そういう倭人の項っていうのがある。そこには当時の魏という国と日本の交流について書かれている。そこに「邪馬台国」というのが出てくる。当時、邪馬台国は一応、魏の交渉相手ですからね。そしてその項には「邪馬台国の民族の最大の特徴は、入れ墨だ」って書いてある。「男は大も小も……」、これは恐らく「大人も子どもも」っていう意味。「偉い人も偉くない人も」って訳する人もいるんですけど、恐らくは「大人も子どもも」。「大も小も、男は全員、顔に入れ墨をしている」と。ところが、顔に入れ墨をした遺物っていうのは日本の中でそんなにたくさんは出てこない。一番多いのは瀬戸内で、点数が一番多いのは岡山県。その次が香川県なんです。その中で一番大きい遺物っていうのは、さっきお話しした、善通寺市立郷土館にある仙遊遺跡の古墳から出てきた石棺の上に描かれてある人面紋なんです。ここからはもう、私の勝手な想像ですけど、「もしかすると佐伯一族っていうのは、邪馬台国につながるような人たちだったのかな」と。だってね、邪馬台国が滅んだのち、150年ぐらい経ったところに継体天皇っていう方が出てくるんですけども、継体天皇のいろんな歴史の記述の中に、入れ墨について書いてあるところがあって「俺の部下で悪いやつがいたから、入れ墨をしてやったよ」っていう書き方をしているんです。つまり、今の朝廷につながる系統の中では、入れ墨をする（される）というのは罪人とかそういう人たちだったということ。それは逆に言うと、邪馬台国というのが日本をかつて治めていたんだとしたら、それとは違う文化が150年後に出来たんだということの証明ですよ（※豪族の石棺に人面紋→150年後→罪人に入れ墨）。じゃあ、「その邪馬台国の文明を支配していた人たちはどこに居た

のか？」っていうと、「その遺物（人面紋）があるところ」っていうことになるんですけども、ただ、その肝心な人面紋っていうのは極めて少ない。見つかっていない。邪馬台国っていうのはどんなに短く見積もっても150年間ぐらいは日本を治めている。もっと永いかもわかりませんが。だいたい西暦150年から300年くらいの間が邪馬台国だったというふうに見られているんですけども、そんなに長い間日本を支配していたのに、何故か人面紋っていうのは滅多に出てこないんですよ。しかしその数少ない一つで、しかも最大のものがこの善通寺から出てきた。そういうことを考えると、「もしかすると佐伯一族っていうのは邪馬台国につながる人たちだったんだろうか」となる。今まで調査されてきた古墳も、ちょっとほかの地域では見られないような古墳がたくさん出てきていますよね。先ほど言った金銅製の冠帽だけではなくて、いろんな馬具とか、それから特に宮が尾古墳の「線刻画」という、石に鉄ピ（？）っていう鉄の道具で描くものですけども、それがたくさん出ていて、そこには大勢の人たちが乗った船の画とか、武具をつけた騎馬像とか、明らかにそういう人たちだよなって思われる像が描かれてあったりして、「これ、ただごとじゃないんじゃないかな。もうちょっと学者の先生方も勉強してくれたら僕うれしいな」というふうに思って、いろんな方に会うたびに「ちょっと研究してくださいよ」って頼んでいるんですけどね。

そういうことも含めて、歴史の波間に隠れてしまった歴史の真実みたいなものがたくさんあるんだと思う。それは学者だけが調べるんじゃなくて、皆さんたちのような、この土地に生まれて、育って、実感を持っている人たちがやっぱりもっと歴史に興味を持って、自分たちのふるさとを掘り返すみたいなことをしていたら、きっと面白いし、為になるといいますか、自分たちの誇りにできるような話が次々と見つかるんじゃないかなというふうに思っております。はい。ちょっとなんか、脇道にも逸れましたけれども、この辺で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。